

報道関係者各位

2026 年 10 月 7 日

学校体育館断熱プロジェクト実行会議

事務局：公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES）

協力：一般社団法人 SDGs in SPORTS

2026 年夏「空調のない体育館、失われた練習時間は約 4 倍」

小中学校の指導者 2 人に 1 人が「命に関わる暑さ」と回答

6 競技団体が賛同 「脱！サウナ体育館プロジェクト」始動

～桃田賢斗選手ら登壇し、スポーツの日を前に東京でローンチ～

関係団体・専門家で構成する学校体育館断熱プロジェクト実行会議（事務局：公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES）、協力：SDGs in SPORTS）は、10 月 12 日（月・祝）のスポーツの日を前に、学校体育館の暑さを社会課題として可視化し解決を目指す「脱！サウナ体育館プロジェクト」をローンチしました。

昨日より、桃田賢斗選手らアスリートが「暑かった体育館」の記憶を語るインタビュー映像、プロジェクト公式 Web サイトを公開。さらに、10 月 8 日（木）には石川県輪島市の輪島小学校でも子どもたちとともに啓発活動を行います。



（左）桃田賢斗選手 （右）志田千陽選手

※ご掲載の際は、桃田選手のビジュアルを優先してご使用ください。

気候変動による猛暑は、子どもたちのスポーツ環境を大きく変えつつあります。文部科学省の調査（令和 8 年 5 月 1 日現在）によると、公立小中学校等の普通教室の空調（冷房）設備設置率が 99.6%に達する一方、体育

館等は 31.7%にとどまります。「勉強する場所は涼しく、体を動かす場所は暑いまま」。窓を閉め切った館内は、日射や輻射熱等の影響により厳しい暑熱環境となる場合があり、熱中症の危険に加え、体育や部活動の中止・短縮によって、子どもたちの運動・スポーツの機会に影響が及んでいます。

SDGs in Sports が実施した「消えた夏練」実態調査では、空調のない体育館で指導する指導者がこの夏に暑さで失った練習時間は平均 8.9 時間と、空調のある体育館の約 4 倍にのぼりました。指導者の 2 人に 1 人が「このまま続けたら命に関わる」と感じながら、現場で判断を迫られています。

課題は空調の有無だけではありません。屋根や窓などの断熱性能が十分でない場合、外からの熱の影響を受けやすく、空調効率の低下や電気代の増加につながります。さらに体育館は災害時の指定避難所でもあり、その空調設置率は都道府県間で 0.8%～95.6%と大きな差があります。

本プロジェクトは、こうした体育館の暑さを社会課題として可視化し、アスリートや賛同団体、有識者、自治体・企業とともに解決の輪を広げていきます。

■「脱！サウナ体育館プロジェクト」概要

本プロジェクトが目指すこと

本プロジェクトは、全国の学校体育館を「夏でも安心してスポーツができ、災害時には命を守れる場所」にすることを目指します。

①**猛暑でも安心してスポーツができる体育館へ**：子どもたちが季節を問わず、体育や部活動に安心して取り組める環境をつくれます。

②**「冷やす」前に「熱を入れない」を当たり前に**：空調設備の導入だけでなく、建物の断熱性能を高めることで、エネルギー効率にも配慮した体育館整備を全国に広げます。

③**住む場所で差が生まれない避難所へ**：地域による体育館の空調・断熱整備の格差を解消し、災害時にも命と健康を守れる避難環境の実現を目指します。

本プロジェクトの取り組み

こうした目標の実現に向け、本プロジェクトでは以下の取り組みを進めます。

- **モデル体育館で調査・検討する**：2 件程度の学校体育館を対象に、専門家による現地調査、断熱・空調方式の検討、整備方針・仕様等の作成支援を行います。
- **自治体と一緒に考える**：体育館の暑さや断熱に課題を抱える自治体・教育委員会・学校関係者と対話し、それぞれの地域に合った空調・断熱整備について技術的なアドバイスを行います。
- **知識とノウハウを全国へ広げる**：体育館断熱の考え方や整備のポイント、モデル地域で得られた知見をガイドブックやオンラインセミナーなどを通じて公開し、全国の自治体や教育関係者が活用できるようにします。
- **アスリート、競技団体とともに社会へ発信する**：スポーツをする当事者であるアスリートの声を通じて、暑さによってスポーツができなくなる問題や、体育館の空調・断熱の重要性を社会に伝えます。動画やウェブサイトなどを通じた情報発信も行います。
- **整備を後押しする制度・財源の選択肢を整理する**：国の支援制度や官民連携なども視野に入れ、自治体が学校体育館の断熱・空調整備を進める際に活用できる制度や財源の選択肢を整理・検討します。モデル地域で得られた知見とあわせて発信し、全国の自治体で活用できる環境づくりにつなげていきます。

プロジェクト名

脱！サウナ体育館プロジェクト

主催

学校体育館断熱プロジェクト実行会議

（事務局：公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES））

一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟

一般社団法人日本ボッチャ協会

賛同団体

公益財団法人日本バドミントン協会

公益財団法人日本バレーボール協会

公益財団法人日本卓球協会

公益財団法人日本体操協会

助成	日本財団
後援	公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本スポーツ協会
公式 Web サイト	https://sauna-gym.jp/

【プロジェクト始動に際し、2つのトピックスを公開】

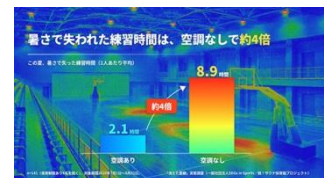
■ トピックス①「消えた夏練」実態調査

一般社団法人 SDGs in Sports が、学校体育館で指導する指導者 147 名（21 都道府県）に調査したところ、体育館の空調の有無によって、この夏の練習時間と子どもたちの安全に大きな差が生まれていました。

ポイント① 暑さで失われた練習時間は、空調なしで空調ありの約 4 倍

空調のない体育館の指導者が、この夏に暑さで失った練習時間は平均 8.9 時間。

空調のある体育館（平均 2.1 時間）の約 4 倍にのぼりました。



ポイント② 空調なしの 92%が、暑さで活動の中止・短縮・変更を経験

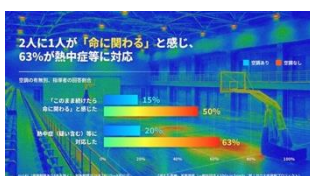
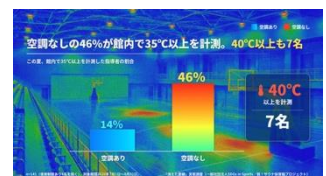
空調のある体育館（25%）と比べ、3 倍以上の差がありました。

「完全中止」だけでも約 4 割が経験しています。

ポイント③ 館内で 35℃以上を計測した指導者は 46%。40℃以上も 7 名

空調のない体育館では、46%が館内で 35℃以上を計測（空調あり 14%）。40℃

以上を計測した指導者も 7 名いました。



ポイント④ 2 人に 1 人が「命に関わる」と感じ、63%が熱中症等に対応

空調のない体育館の指導者の 50%が「このまま続けたら命に関わる」と感じ（空調あり 15%）、63%が熱中症（疑い含む）等に対応しました（空調あり 20%）。

8 割以上が暑さ指数（WBGT）や熱中症警戒アラートを基準に判断していますが、基準を守れば練習が消え、続けられれば命に関わる——その線を、現場の指導者が引いています。

ポイント⑤ 指導者の 89%が、空調の有無による「格差」を実感

体育館の空調の有無が、練習量・競技力・スポーツの機会の「格差」につながっていると 89%が回答しました。文科省（2026）のデータからも、東京都の空調設置率が



95.6%なのに対し、一番低い佐賀県では 0.8%と大きな差があることが示されています。

※調査概要：「消えた夏練」実態調査／調査主体：一般社団法人 SDGs in Sports（脱！サウナ体育館プロジェクト）／対象：学校体育館を主な活動場所とする指導者／回答期間：2026 年 9 月 1 日～9 月 20 日／対象期間：2026 年 7 月 1 日～8 月 31 日の活動／有効回答数：147 名（21 都道府県）。空調の有無による比較は「使用制限あり」の 6 名を除く 141 名で集計。

■ トピックス② 桃田選手のインタビュー映像について

本日より元バドミントン世界王者・桃田賢斗選手（NTT 東日本 選手兼コーチ）の原体験インタビュー映像を公開。小学 2 年生から 25 年間、体育館でバドミントンを続けてきた桃田選手。風の影響を受けるバドミントンは真夏でも窓やカーテンを閉め切って練習するのが当たり前で、高校 1 年生のインターハイでは脱水症状に陥り、意識が朦朧とする中で敗れた経験もあります。映像では、「暑かった体育館」の記憶とともに、次の世代への想いを語っています。

※インタビュー映像の公開先：<https://www.youtube.com/watch?v=3d32PQZMugE>



■ アスリートコメント



志田 千陽 氏（バドミントン）

「酷暑でも極寒の中でも空調のない体育館で練習する子どもたちがたくさんいます。バドミントン選手として、体育館で育ててもらったひとりの選手としてこのプロジェクトに心より賛同します。」



清水 邦広 氏（バレーボール）

「私自身、これまで酷暑や極寒の中で数多くの練習を重ねてきた経験があります。だからこそ、全国の未来ある子どもたちが、思いきりスポーツに打ち込める環境が整っていくことは、本当に素晴らしいことだと感じています。」



潮田 玲子 氏（バドミントン）

「体育館を激しく動き続けるバドミントン選手にとって、暑さは命と競技の可能性を脅かします。私もインターハイで熱中症になり、実力を発揮できなかった苦い経験があります。子どもたちの夢と命を守る環境整備に期待します。」



陣内 貴美子 氏（バドミントン）

「体育館の環境は、選手のパフォーマンスや子どもたちの成長に大きく関わります。熊本地震では、体育館が避難所として人の命と生活を支える場所になることも実感しました。快適で安全な体育館を増やすこのプロジェクトを応援します。」



鹿島 文博 氏（体操）

「体育館は、子どもたちがスポーツを楽しみ、夢に向かって挑戦する大切な場所です。誰もが安心・安全にスポーツに取り組める環境を未来へつないでいきたい。「脱！サウナ体育館プロジェクト」を心から応援します。」

賛同アスリート（五十音順・敬称略）：東俊介（ハンドボール）、上山容弘（トランポリン）、大山加奈（バレーボール）、鹿島文博（体操）、加藤憲二（卓球）、佐藤美弥（バレーボール）、潮田玲子（バドミントン）、志田千陽（バドミントン）、清水邦広（バレーボール）、下川寛子（卓球）、陣内貴美子（バドミントン）、杉本美香（柔道）、田渡凌（バスケットボール）、寺本明日香（体操）、根木慎志（車いすバスケットボール）、見延

和靖（フェンシング）

※全アスリートのコメントは公式 Web サイトに掲載しています。

■ 専門家コメント

竹内 昌義 氏（建築家／東北芸術工科大学 教授）



「屋根や窓などの断熱性能が十分でない体育館では、空調を入れても外からの熱が入り続け、冷えにくく、電気代もかさみがちです。大切なのは、冷やす前に“熱を入れ

ない”こと。断熱と空調を組み合わせれば、体育館は夏でも安心してスポーツができる場所になり、災害時には命を守る避難所にもなります。」

一級建築士・省エネ建築診断士。「山形エコハウス」の設計を契機に、住宅から公共建築まで断熱・省エネの実践と普及に取り組む。学校の断熱改修ワークショップや自治体の体育館暑熱対策の検証にも携わり、国の省エネ対策のあり方検討会にも参加。

■ 公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES）について

IGES は、持続可能な社会への変革を促すための政策・実践研究を行う研究機関です。1998 年、日本政府と神奈川県との支援により設立され、気候変動をはじめとする地球環境問題について、政府・自治体・企業・研究機関などと連携しながら、研究成果を政策や社会の変化につなげる活動を行っています。現在は約 200 名規模の研究者・職員が活動しています。

IGES は猛暑への適応策として、学校体育館の空調設備だけでなく断熱改修を組み合わせた環境整備に着目し、快適性や省エネルギー化、災害時の避難環境の改善、地域のレジリエンス向上など、体育館をめぐる社会課題を、関係団体・専門家と連携しながら横断して研究・発信しています。2026 年 7 月には「猛暑でもスポーツを止めない ― 空調整備・断熱改修で実現する快適性と防災力 ―」と題したイベントを開催しました。

URL： <https://www.iges.or.jp/>

■ 一般社団法人 SDGs in Sports について

一般社団法人 SDGs in Sports は、スポーツの力を生かして社会課題の解決を目指す団体です。元競泳日本代表でユニセフ職員として途上国の教育支援・平和構築に携わってきた井本直歩子が代表理事を務めています。気候変動・環境、ジェンダー平等、多様性・共生社会などをテーマに、アスリートやスポーツ団体とともに課題解決、政策提言、発信や教育・啓発活動に取り組んでおり、2023 年には公益財団法人日本スポーツ協会（JSPO）と包括連携協定を締結しました。

URL：<https://sports-sdgs.org/>

本件に関する報道関係者からのお問い合わせ先

脱！サウナ体育館プロジェクト PR 事務局（onyomi 内） 担当：遠藤・中嶋

TEL：050-1724-3978 Email：saunataiikukan-pr@onyomi.jp